

---

## 近世アジアの皮革 5. 日本の日用革製品

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

---

### 1. はじめに

毛皮や革は、大昔から天候や動植物からの身体保護のために使用されてきた。その後、甲冑や武具として使用された。家康が1603年（慶長8）に江戸幕府を開設して以来、戦乱の世から幕藩体制が成立し、天下泰平の世となり、皮革は武具から衣類、履物、袋物、文庫等日常の生活用品に使用されるようになった。中世において進行していた手工業は農業から分離・独立し、社会が安定すると一層進み、産業が発展した。一方、江戸や全国の城下町には、大名や武士が住み、さらに商人も住み、商品の流通が盛んになった。都市の形成・発展は、消費生活の活発化をもたらし、生活用品を製作する手工業的生産の需要を増大させ、その製品を全国に広めた。このことは、種々の職人の形成と分化をもたらし、特定の職種集団の職人町が形成された。その職人町には鍛冶屋町、紺屋町、大工町が一般的であるが、革屋町もあった。室町後期の天文年間（1532-1554）に外国より革が輸入され、その品質および彩色が良く好まれた。この革を印伝革（印度伝来の意）と称した。江戸時代には、国内でそれを模した革や独自の革が製造された。

### 2. 革製造

古代においては、皮および革は全国から貢納されていた。江戸前期の頃の皮生産国

は、鹿皮が大和、陸奥、出羽、丹波、安芸、周防、薩摩、蝦夷等であり、馬皮が大和、播磨等であり、熊皮が陸奥、越後、蝦夷等であり、<sup>らっこ</sup> 狢皮および<sup>あざらし</sup> 海豹の皮が蝦夷であり、白兔皮が越後、佐渡であった<sup>1)</sup>。京都、大阪、播磨の姫路での革製造が盛んであった。姫路の革は、古く足利義満の時代より、「播磨の革工能く熟皮を作る」と評判であった。江戸の浅草および甲州でも盛んであった。肥後の八代革は、古くから著名であり、江戸時代末まで製造された。筑前の鞣し業は、慶長年間に黒田長政が武具・馬具の製作用に姫路より移封時に革職人を招き、鞣し技術を伝授させたことに起源がある<sup>2, 3)</sup>。

革の製造法は、平安時代の「延喜式」や江戸時代の「<sup>し か すう よう</sup> 止戈枢要」に記されているように、鹿皮は毛を削り落とし、脳漿鞣しを行ったものであり、古代より基本的には同じである（本誌No.164 P.3）。牛馬皮の鞣しも古代より皮を放置あるいは川に晒して脱毛し、菜種油・塩による処理と天日干しを行った。とりわけ姫路の革は高い評価を得ていたが、それは姫路の街中を流れる市川によるとされていた。現代に至り、その川の水質を検査したが、理由は不明であった。なお今日、日本の伝統的な革と称される「姫路革」および「甲州印伝革」は、古来の鞣し法によるものではなく、ホルマリン鞣しによる革である。石灰と硫化ソーダ

による脱毛法ならびにタンニン鞣しやクロム鞣しは、明治維新以降、西洋からの導入によるものである。

舶来品を模して種々の革が製作された。ハルシヤ（ペルシア）革を模した紋百爾齋亜革と黒百爾齋亜革、セイロン水牛皮を模した篩斗目水牛皮、ウスコベヤ（モスクワ）革を模した新ウスコベヤ革、オランダ革を模した紋小豆革、インドのサントメ革を模した黒聖多黙革等がある<sup>1)</sup>。江戸中期には、百爾齋亜革を模した紅革、紋印度亜革を彩色した七宝印度亜革、中国の印花革を模した印花革（大明革）が製造された。甲州印伝革は、鹿革に漆付けをしたものである。

種々の染革や画革については、「温古鞣」に詳しく記されている<sup>4)</sup>。染色法には、一般的には染料を用いて染色し、文様は型の糊置きあるいは纈纈してから行う。さらに藁や松葉、松根での燻しや漆の塗付がある。

### 3. 革職人

室町後期に制作された「七十一番職人歌合」は、京都を背景とした職人の人物像や風俗が描かれている<sup>5)</sup>。それには、皮革関係の職種として、鎧細工や武具の他に

まりくりり かわ こ むかばき  
鞣括、皮籠、行膝造、沓造などが挙げられているが、江戸前期元禄3年（1690）の「人倫訓蒙図彙」には、160余の職種が挙げられており、職種が急速に分化した<sup>6)</sup>。この中には、革師や滑革師、足袋師、雪駄師、巾着師、紙入師などが挙げられる。その他にも遊戯・芸能関係の太鼓師や三味線師、鞠師等がある。室町末期の川越喜多院の「職人尽図屏風」の革師の図には、中央に裁板に革を広げた足袋の裁断、右側に染めて平行線の文様を出すために円筒に巻いた革の糸かけ、右下に柄巻、前部に袴の仕立、左に張りの糸通しが描かれている（図1左）<sup>5)</sup>。さらに袴、足袋、革羽織等の製品が掛けられている。一方、「人倫訓蒙図彙」の革師は鹿皮を滑、足袋、羽織等を作り、八幡（山城）では菖蒲革や黒染の革を造った（図1右）<sup>6)</sup>。滑革師は革を作り、革師がこれを用いて馬具、銀袋、布団、枕等を作り、毛革（皮）を用いる者を毛革師と称した。右側の図（滑革師）には、上部に巻かれた革があり、中央には革を巻いている作業の様子、下部に広げて乾燥している革が描かれている。左側の図（革師）には、枕かなにかを手にした作業、障泥と足袋、履が描かれている。

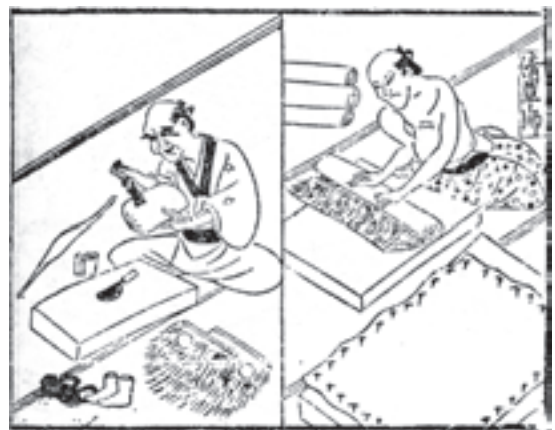


図1 「職人尽図屏風」(左)と「人倫訓蒙図彙」(右)の革師



図2 信長所用の革袴と家康所用の革陣羽織

#### 4. 衣服

江戸時代になり、諸大名が鞍馬を飾り、武人が革袴や革足袋を用いるようになった<sup>1.7)</sup>。信長所用の革袴が捻見寺（近江八幡市）に収蔵されており、さらに家康所用の革陣羽織が紀州東照宮に所蔵されている（図2）<sup>8.9)</sup>。革袴の素材は記されていないが、鹿革であろう。家康の陣羽織は金唐草風の牛革の表面を金泥塗りにしたもので、後身丈が77cmである。

都市化した江戸城下において、大きな火災が度々起こるようになり、大名火消や町火消が生まれた。江戸城や大名屋敷の火災の際には、大名は華麗な火事装束を着用して馳せ参じる慣わしであった。その装束は、威儀服として羅紗や羅背板などの毛織物が一般に用いられたが、革製のものもあり、光圀の火事羽織は革製であった<sup>9)</sup>。火消人足（鳶の者）の装束は、木綿製で刺子が施されているが、その頭や武家の装束には革が多く使用された。明歴の大火（1657年）の時に、浅野因幡守が熏革の羽織を着用していた。この大火以降、革羽織が好んで着用され、後に鳶の者や庶民も着用した。高山の屋台会館には、大名火消の

鹿皮大挺衣装（羽織、胸当て、袴）が展示されている（2004年筆者検分）。ドイツ皮革博物館には、袖の大きいT字形で着丈97cm、衿67cmの衿の長い鹿革（熏革）の火事羽織が収蔵されている（図3）<sup>10)</sup>。この鹿革は、大きさから中国あるいは東南アジアのものと推定されている。

「和漢三才図会」には、足袋は主に鹿革で作られた半靴であり、単皮あるいは踏皮と記されていた<sup>11)</sup>。日本産の鹿革は薄く小さいので、外国産の物が上とされていた。猿や犬の皮も使用された。元々は指股の無



図3 火事革羽織

い靴下状の襪しとうずのようなものであったが、平安時代には、鼻緒のある草履や草鞋など履くようになり、指股のある物に変化した。室町時代には、武人が革足袋を履くことが礼となり、戦の時には熏革を用いた。江戸初期頃までは、女性の多くは紫革を用いたが、白革や浅黄革も用いた。一方、男性は主に白革を用い、さらに小桜紋などの模様のある革も用いた。明暦の江戸大火の後には、革羽織などの火事装束の需要が増し、革が高騰し、木綿の足袋が作られるようになった。江戸前期の寛永の頃は木綿足袋が贅沢品であり、普通は革足袋が使用された。江戸中期には、革足袋が廃れ、木綿足袋が普通になった。家康所用の白足袋4足（底長22.7～24.3cm）と宗春（尾張七代）の火事装束用乱星文熏革足袋（底長24.2cm）が徳川美術館に収蔵されている<sup>9)</sup>。これらは筒長で鹿の革紐がついている。

行膝むかばきは中世の頃に武士が騎馬で遠出や狩猟の時に用いたが、近世には使用されなくなった。八代将軍吉宗が騎射の古儀を復活してから、流鏑馬装束やぶさめに取り入れられている。

## 5. 履物

平安時代末頃から武将が騎乗する時に、足を熊や猪、海豹などの毛皮で巾着状に包み、縁を紐で縛る貫つらぬきを用いたが、これが江戸時代になると、毛皮の代わりに牛や豚、猪などの革を用いた綱貫つなぬきを農民や行商人が使用した（本誌No.143 P.29）。西洋風の靴は幕末に洋式軍隊の伝習生用に輸入されたが、普及はされず、実際に使用されたのは明治以降であった。

草履や草鞋は古くから一般的な履物であったが、平安時代には藁履の裏に牛革を貼った多知波免たち は め たち は め（屨鞞）を履き、安土桃山

時代には熊や猪、鹿の毛皮を草履の表に貼った毛皮草履を履いた。これらが江戸時代になると、筍の皮で編んだ草履の裏に牛革を貼った雪駄（雪踏）に移行した<sup>11)</sup>。馬革も使用された。底革に鉄鋌を打った武者草鞋や踵しりがねに尻鉄を打った石割雪駄、表裏を竹皮製で中に革を挟んだもの、その逆に、表裏を革で中を藁にしたカタピン雪駄など種々の雪駄が使用された。鼻緒には藁や竹皮の他に白革も用いられた。下駄の鼻緒にも革が用いられた。雪駄は江戸中期の天保年間には全国的に普及し、主に江戸、京都、堺、大阪で製造された。江戸末期までは広く使用されたが、明治以降は洋靴の普及により廃れた。

## 6. 袋物

火打袋は古くは革または布で作り、武士が陣中や狩猟の時、腰に下げたが、江戸時代にはそれに由来する巾着や胴乱、鼻紙入れ等が製造され、庶民も使用した<sup>1, 12, 13)</sup>。もとは銃弾を入れた胴乱は煙草入れや銭入れ、薬入れ等にも使用された。懐中に入れる煙草入れは当初油紙製であったが、その後、革等が用いられた。銭入れ（早道はやみち）や鼻紙入れにも革が使用された。これらの袋物には印伝革が好まれたが、貴重であり、その他の染革や織物、羅紗等も用いられた。

本来は甲冑に用いられていた菖蒲草（本誌No.164 P.2）は近世に至り、刀柄や鞘の下げ緒に用いられ、また巾着や煙草入れ、鼻紙入れに用いられた。たばこと塩の博物館収蔵の「菖蒲草煙草入」の筒長が20cm余で袋の幅が10cmである（図4）<sup>7)</sup>。金唐革や紅革、サントメ革もこれらの袋物に使用されたが、真の舶来品は貴重であり、模造品が多用された。大阪の淀屋橋では煙草入れを専ら馬革で製造した。





図4 菖蒲革煙草入

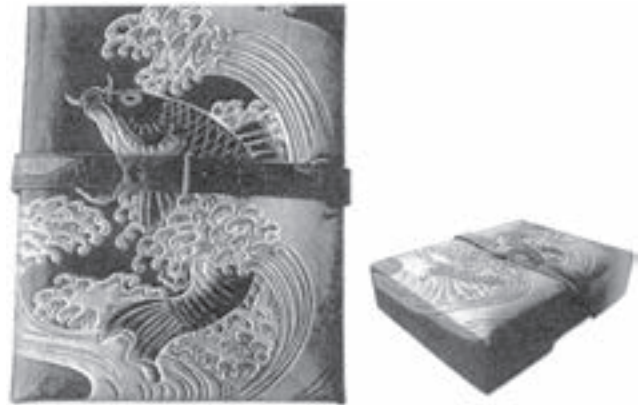


図5 紅革鯉滝昇図文庫

## 7. 革文庫

上級武士が書類入れとして革製の小箱すなわち革文庫を使用した。大きさは一定ではなく、縦20~30cm、横10~30cm、高さ10cmほどであり、花鳥風月の文様が施された。紅革を下地とし、鯉と波を黒漆と金箔で表現した「紅革鯉滝昇図文庫」（縦33.5 横25 高さ9cm 林久良蔵）は、工芸品としても価値がある（図5）<sup>3)</sup>。姫路藩は革文庫や革硯箱を将軍家に慣例として献上していた。革文庫は高価なものであり、庶民には高嶺の花であったので、それを模した擬革紙文庫が製造された。明治初期に、ウィーン、フィラデルフィア、パリの万国博覧会に姫路革と共に擬革紙、革文庫が出品され、高い評価を得た。

## 8. 太鼓

太鼓には木をくり抜いた円筒形の胴に両側から皮を張りつけたものと鉄製の輪に皮を張り、それを紐で結ぶものがある。胴の木は櫻が最高とされ、皮は3, 4歳の和牛の尻皮が最高とされていた<sup>13)</sup>。江戸では、銀（皮の表面）付きの皮を、大阪では、銀無しの皮を使用した。江戸前期の「ようしゅうふし雍州府志」には、京都天部村の者近江の山中の木を穿った筒の両端に馬革（皮）を

貼り太鼓の大なるものを製するとある<sup>14)</sup>。後世3尺以上の太鼓皮はもっぱら牛皮を用いたが、馬皮も使用された時期もあったということである。鼓類には馬皮が良いとされていた。皮の脱毛は米糠の溶液に皮を入れ、発酵により毛根部を緩めて行った。あるいは土の中に埋めたり川に晒した。太鼓の皮は鞣しを行わないので、雨を避けなければならない。

胴に皮を張った太鼓には、御時太鼓や櫓太鼓、陣太鼓、大拍子（長胴の締太鼓）、団扇太鼓等があり、鉄製の輪に張る太鼓には、雅楽や能の鞆鼓や囃子太鼓等がある。全国各地の城には時刻ならびに登城あるいは緊急事態の合図を告げる鼓楼があり、大坂城のそれは3, 4里響き、太鼓の大きさは長さ3尺5寸、差渡し2尺余であった<sup>15)</sup>。長期間の使用で、胴は損傷しないが、皮が損傷し、皮の張替が行われた。太鼓製作や皮張替に高度な技術が必要であり、名人と言われる京都や大阪の職人に、「太鼓屋」の屋号が許された。加賀藩の太鼓作りは、江戸初期に播磨からの太鼓師を招いて始まり、今日まで続いている。

稲作農業において豊富な水と害虫の除去は重要であり、雨乞いや虫追いの行事が各地で行われていた。熊本県の宇土雨乞い大

太鼓は櫛胴で面径1.32～0.81m、長さ2.07～1.22mの横から叩く長胴太鼓や、面径1.23～1.05m、長さ0.85～0.68mの上から叩くドラ太鼓が26個あり、その中の最古のものが寛文13年（1673）製であり、多数は江戸後期製作あるいは不明である（1999年筆者検分）。江戸の里神楽は宮中で行われたものと区別され、神社で行われ、大太鼓、小太鼓、大拍子、笛が使用されていた。上諏訪大社の四方吹通し入母屋の神楽殿（文政10年創建）に面径一尋ほどの長胴太鼓が新旧2個置かれており、古い方は面も胴も黒ずんでおり、創建当時の太鼓と思われた（2010年筆者検分）。

太鼓や鼓は、能楽や歌舞伎にも使用された。全国各地において、農作物の収穫時に自然の恵みを神に感謝し、太鼓や鉦、笛に合わせて踊ったり歌ったりした。それが祭りや盆踊り等の庶民の行事となり、太鼓は伴奏楽器として今日に至っている。

## 9. まとめ

江戸時代の革製造法は古代よりあまり変化なく、鹿皮は脳漿を用い、牛馬皮は菜種油・塩を用いて鞣した。外国からも優れた革が輸入され、国内でそれらを模した革も製造された。

職人が分化され、革細工においても種々の職人が生まれた。革袴や革羽織、足袋、雪駄等が生産され、さらに巾着や紙入れ、煙草入れ等が生産された。革文庫は工芸品として高く評価された。太鼓は城での時報や連絡に使用され、神楽や能楽の芸能、祭りや雨乞い等の行事に広く使用された。

## 文 献

- 1) 黒川真頼：増補訂正 工芸志料，宮内省博物館（1888）P. 107.
- 2) 大林雄也：大日本産業事蹟 2, 東洋文庫

- 478, 平凡社（1986）P. 243.
- 3) 林久良：姫路皮革物語，私家版（2012）P. 11, 125.
- 4) 春田永年著 正宗敦夫編：温古斃彙，日本古典全集刊行会（1937）P. 5.
- 5) 青木国夫編：七十一番職人歌合；職人尽絵；彩画職人部類，恒和出版（1977）P. 9, 155.
- 6) 不明：人倫訓蒙図彙，東洋文庫 519, 平凡社（1990）P. 167.
- 7) サントリー美術館編集・発行：染め（1983）P. 1, 60.
- 8) 家永三郎編：日本の歴史 3，ほるぷ出版（1980）P. 14.
- 9) 「大徳川展」主催事務局編集・発行：大徳川展（2007）P. 9.
- 10) Deutsches Ledermuseum : Wettlauf mit der Verganglichkeit, Deutsches Ledermuseum/ Schuhmuseum, Offenbach（2012）P. 151.
- 11) 寺島良安：和漢三才図会，日本庶民生活史料集成 28, 三一書房（1980）P. 453.
- 12) 喜田川守貞著 宇佐美英樹校訂：近世風俗志 5，守貞謾稿，岩波書店（2002）P. 249.
- 13) 三谷一馬：江戸職人図聚，立風書房（1984）P. 164, 172.
- 14) 黒川道祐著 湯浅吉郎編：雍州府志，京都叢書，京都叢書刊行会（1916）P. 198.
- 15) のびしょうじ：太鼓・皮革の町 難波部落の300年，解放出版社（2002）P. 79.